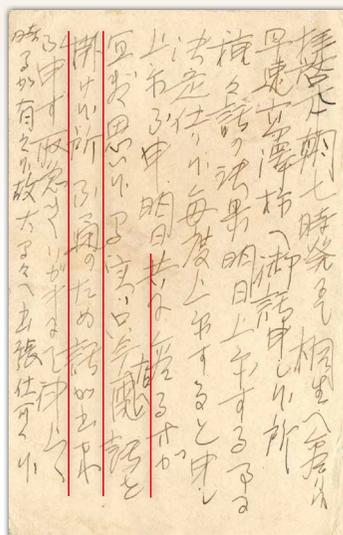
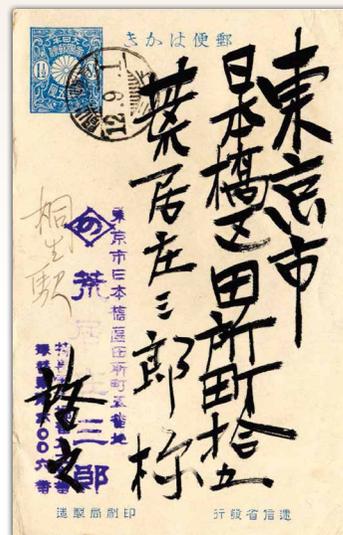


第58回全国切手展 JAPEX2023 誌上予告!

11月3日(金・祝)～5日(日)の3日間、浅草の東京都立産業貿易センター台東館で開催される JAPEX2023。注目を集める企画出品『関東大震災 100年 関東大震災と郵便』展&『日本の郵便はがき誕生150年展』&『ウクライナ切手展』の見どころを、会場での展示に先駆けて紹介します。(編)

『関東大震災100年 関東大震災と郵便』展

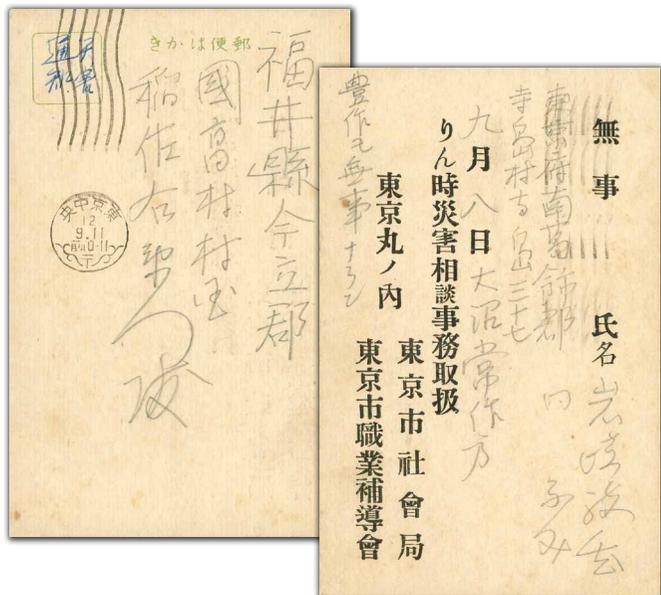


『関東大震災と鉄道網』
(片山七三雄氏)より

▼桐生駅には東京方面の情報はまだ入ってなかったのだろうか。日本橋の荒居庄三郎商店の出張員が、12時50分発の足尾行列車に乗る前に店に電話をしたが不通であったため、急遽、桐生駅で差し出したはがき(高崎小山間/下三便 12.9.1)である。この郵便物を運んだ列車は13時40分に桐生駅を出発し、15時9分に小山駅到着。そこから上野行き列車に接続し、17時55分に上野駅に到着する予定だったが、震災のため途中でしか運行できなかった。

『関東大震災』
(藤岡靖朝氏)より

▼故郷などへ安否を知らせるために被災者に配られたはがきを利用した、差出人側は無料の罹災郵便(料金受取人払い)(東京中央/12.9.11)。切手貼付欄には「災害通知」との表記がある。はがきに印刷された不揃いな活字が応急的に急いで作成されたことを物語っている。



『大正12年の遅延承認電報』
(板橋祐己氏)より



▼罹災地発信の「無料電報の遅延承認扱い」(指定シテ表記)。罹災地での発信は大きく制約を受けたため、鉄道で群馬・高崎へ輸送され、その後山梨・甲府に発信された。中央に「遅延承認の朱印」[40%]



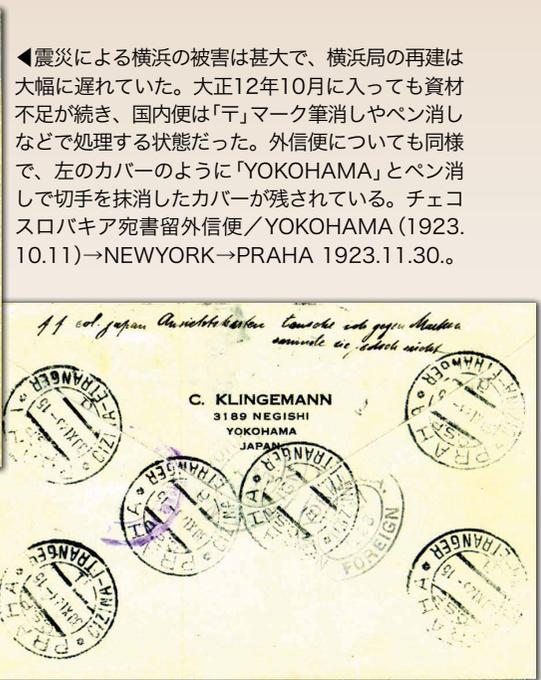
『関東大震災100年』
(鎌倉達敏氏)より

『震災1銭5厘切手』
(奥山昭彦氏)より

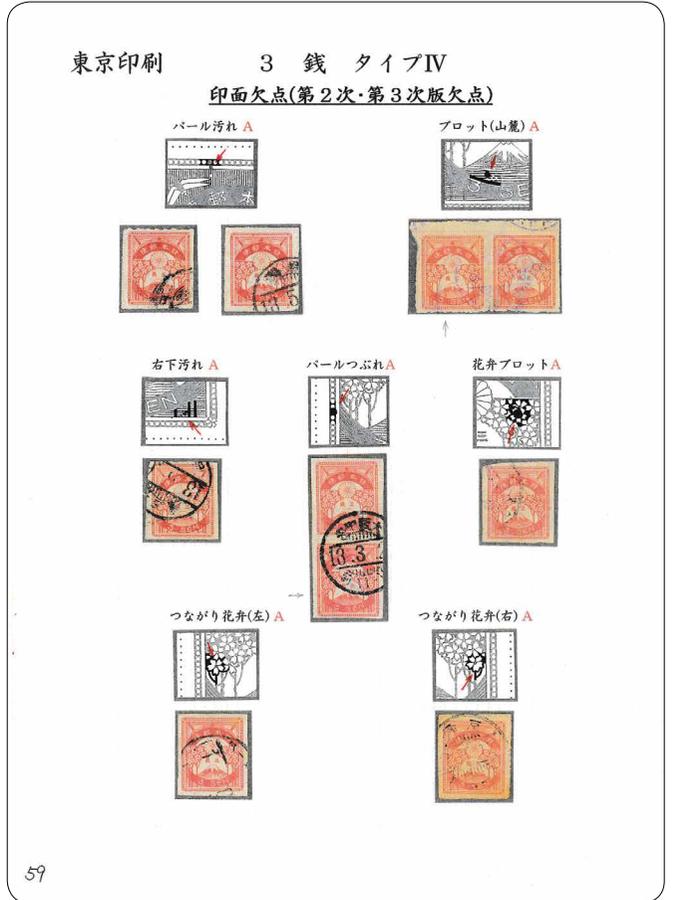


▲ハンガリー宛書留重量便/小石川13.3.25→ブダベスト 1924.4.23。1銭5厘タイプI最大マルチプル(6枚ブロック)貼。吉田一郎差し出し。[45%]

▶震災切手9額面のうち、3銭切手を取り上げ、製造面を中心に新たに確認できた特徴を含め、大阪印刷、東京印刷に分けて展示。右は東京印刷3銭タイプIVの印面欠点(第2次・第3次版欠点)をまとめたリーフ。[45%]

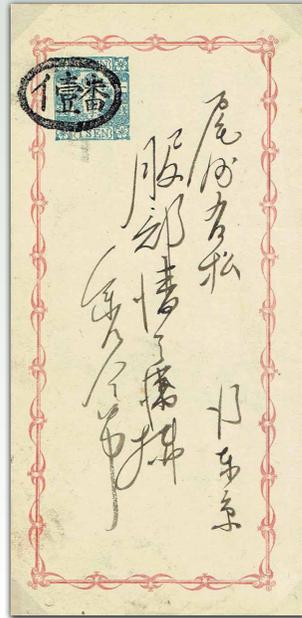


『震災切手3銭』
(狩野正俊氏)より



※2～7頁、特記外、はがき・カバー類50%縮小。

『日本の郵便はがき誕生150年展』



▲紅枠はがき半銭の唐草模様の枠線を、誤って1銭に使用してしまった日本のはがきの最大のエラー。



▲紅枠はがき半銭のブルーフ。自身の作品の中でも最も珍しいマテリアルの1つ。



▲脇なし二つ折はがき半銭(ト)に、洋紙桜2銭仮名入り(イ)と改色桜4銭仮名入り(イ)、鳥15銭仮名入り(イ)を加貼、ロンドン宛外信使用/YOKOHAMA 1875.9.11。二つ折はがきの外信使用としては唯一の貴重な使用例。[45%]

『Postal Cards of Japan 1873-1874』 (齋 享氏)より



▲脇なし二つ折はがき1銭(仮名)に、大型地名検査済印・四日市(伊勢)で明治7年10月30日引受。宛先の伊勢上野を過ぎて、31日に松坂まで紛来、同日、伊勢上野到着(裏面KG印)。

『普通はがき 1873-1945』 (石田 徹氏)より

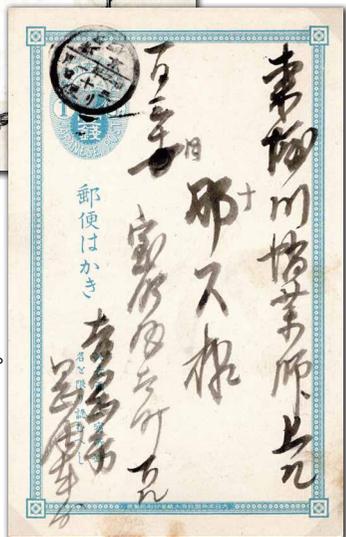


▶小判はがき印刷局銘に、インク浸透式丸一型印。明治31年頃、増大する郵便量に対応するため、改良試行された日付印。印影に絹の網目が見えるのが特徴だが、このはがきの印は国名「山城」の部分に便号「又便」を誤植しており、通常の丸一印は国名と局名が一体型のため、あり得ない。インク浸透式の構造特色をよく表している。

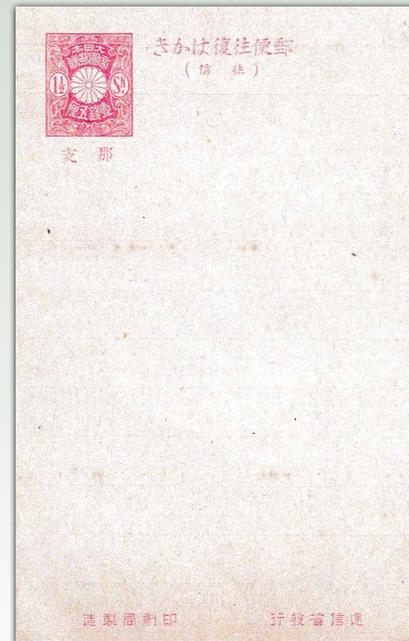


はがきに押されたインク浸透式印。

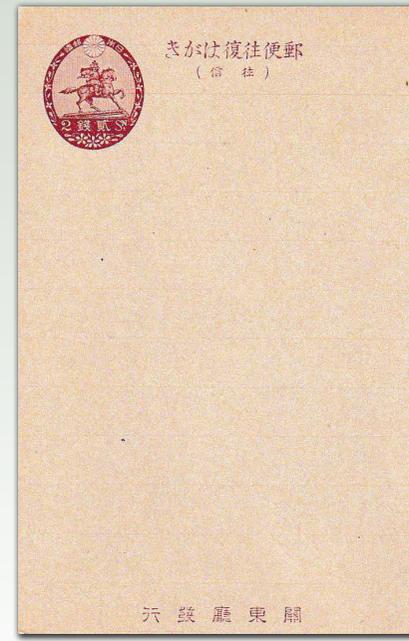
印影を上下反転、国名部分に「又便」が誤植されている。



▲小型仮名入りはがきの雛形。飾磨具(播磨)作成、法規集として県内に配布された。[45%]

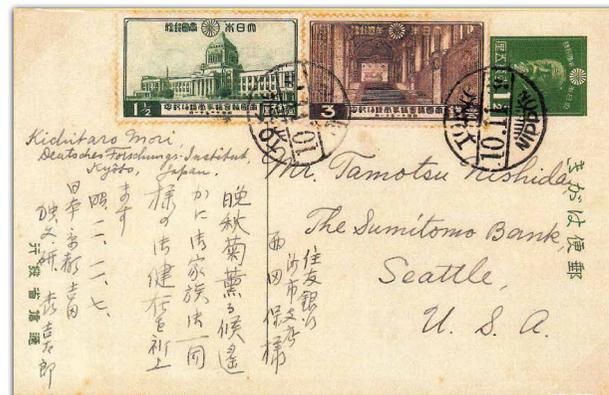


▲分銅はがき1銭5厘「支那」左書き加刷。印面下の「支那」加刷は通常右書きだが、これは左書きとなった変種で、未使用・使用済ともに数通しか発見されていない。[60%]

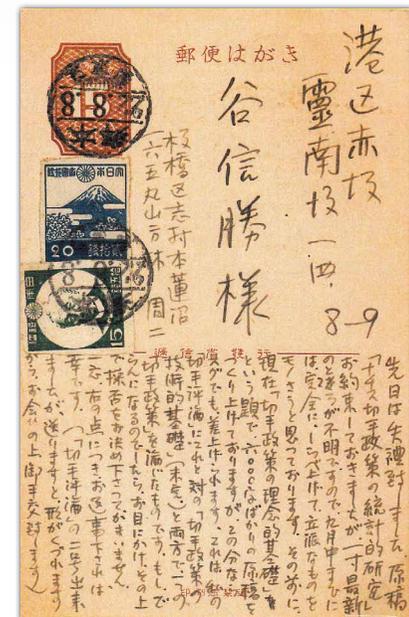


▲関東庁発行濁点補公往復はがき。昔からメインナンバーの珍品として知られていたもので、未使用・使用済ともにオークションなどにもほとんど姿を見せない。[60%]

『日本郵便はがき1873-1945』 (那須伊允氏)より



▲帝国議会議事堂竣工はがき。外信使用6銭料金。帝国議会議事堂竣工はがきの使用例自体大変少ないが、これはさらに少ない外信使用。6銭料金は1937(昭和12)年3月31日までのため、発行してから僅か4カ月半程度の使用期間であった。[65%]



▲日本国憲法公布はがき加貼50銭使用。日本国憲法公布はがきの消印の良いものは大変少ないが、中でもこれは本郷局の変形櫛型印が使用され、さらに価値を高めている。[65%]

『日本の記念特殊葉書 1936-1962』 (須谷伸宏氏)より



▲愛国はがきのダイブルーフ。これを作成した時ははがき料金が1銭5厘だったため、額面表記が「1.5+3.5」となっている。現存1点。[70%]

『ウクライナ切手展』



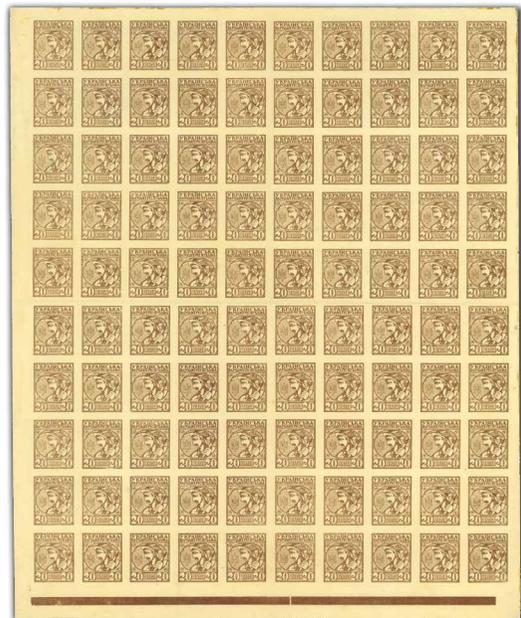
▲ロシア帝国領時代(1870年)のウクライナ・オデーサからフランス・マルセイユ宛のカバー。[40%]

『ウクライナ 栄光と苦難の歴史』
(槇原晃二氏)より



42

▲ロシア帝国切手に、ウクライナ国章「三叉槍」を加刷(1918年)。ウクライナでは1918年の独立後もロシアの普通切手を使用していたが、外から入る切手の使用を防ぐため、キエフ、オデーサなど地域ごとに加刷が行われた。[35%]



▲ウクライナ最初の正刷切手(1918年発行・20シャヒーヴ)のシート(100面)。[25%]

『ウクライナ国民共和国 1918-1920』
(内藤陽介氏)より



▲旧ロシア帝国切手、ウクライナ国民共和国の加刷切手、同正刷切手の混貼使用例。1919年5月13日、ウクライナ北東のロムヌイからソヴィエト・ロシアのペトログラード宛。[60%]



『ヘオルヒー・ナルブート作詩』より

▶ウクライナ最初の切手の原作者として知られる画家、ヘオルヒー・ナルブートの作品を取り上げたロシア帝国時代の絵はがき。作品名「バンドウーラ(ウクライナの伝統楽器)を弾く吟遊詩人」。[45%]

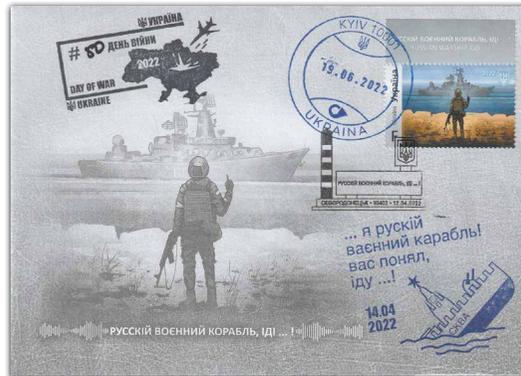


▲1992年10月10日、Dneprodzerzhinsk差し出し、キエフ宛国内書状。旧ソ連切手の料額印面「コペイカ」をボールペンで「ルーブル」に評価変更した貴重な使用例。[45%]

『ウクライナ インフレ 1992-1996』
(伊藤文久氏)より

▶1995年4月20日、Kostohryzove差し出し、スイス宛航空書状。150kb切手を106枚貼。ウクライナ切手の100枚を超える多数貼は珍しい。[40%]

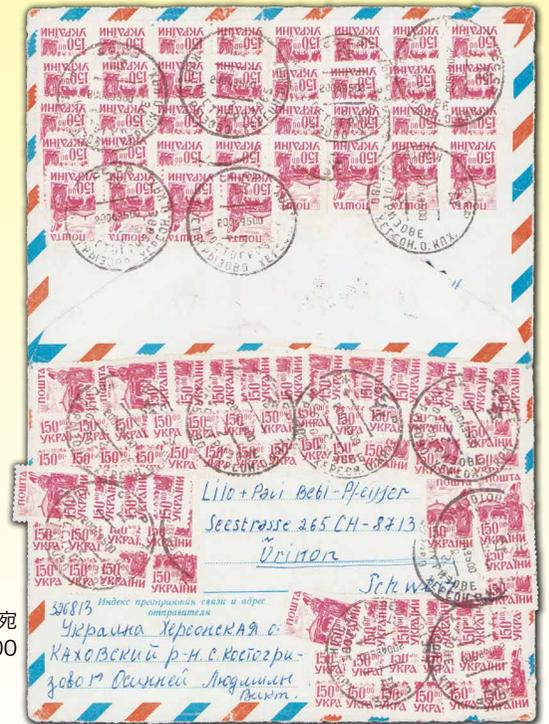
『ロシアのウクライナ侵攻と戦時下の航空郵便』
(伊藤裕介氏)より



▲侵攻初日2月24日、ウクライナの国境警備兵が行った交信「ロシアの軍艦、くたばれ」をテーマに発行された切手の初日カバー。[45%]



▲侵攻開始から約2ヵ月後の戦時下でも無事日本に届いたウクライナからの航空便(書留)。2022年5月4日にルーツク郵便局引受、5月6日キエフ国際交換局、6月2日に我家に到着。[45%]



『ウクライナの誇りと反戦切手』
(佐々木 耕氏)より

第1章 地域と伝統

1.4. 東部地区4州、1自治共和国と1特別市(その2)
ドネツィク州 (Donetsk's Region)

今日用いられる「ドンバス地域」: 最も一般的な定義はドネツィク州とルハーンシク州を指す。

(左) 州の主要農産物ひまわりとドネツ高地で最も高い丘ドネツリッジを指す

(左下) 特定記念物「石の墓」、ナザリフカ村
(右下) 炭坑増産の山とひまわり畑、クラヒフカ村

ザポリージャ州 (Zaporozhye Region)

～ロシアが併合手続きを完了した東・南部4州の一つ～

(上) クルガンの石碑とドニプロ水力発電ダム (DnirohES) (発電出力 1,386MW)
(上と中) ドニプロフスカ HPP ダム (ドニプロ水力発電所、高さ 60m)

(左下) 国立歴史考古学保護区「石の墓」の女性像、マーネ村近く
(中下) 自然・文化・歴史の遺産国立保護区「ホルティツィア」
(右下) ザポリージャのモートル・シエチ社エンジンを搭載した航空機史上最大の多目的ヘリコプター Mi-8MSB

▲ロシアが併合手続きを完了した東部・南部4州のうちの2州、ドネツク州とザポリージャ州の伝統や文化を紹介するリーフ。[40%]